

技術研究本部の歴史を綴る



技術弘報

発行
技術研究本部 総務部総務課
〒162-8830
東京都新宿区市谷本村町5-1
☎03(3268)3111(代)

平成二十五年 年頭の訓示

明けましておめでとうございます。皆様、ご家族共々、健やかに新年を迎えられたことと思います。

私自身、一昨年の八月に本部長に就任して以来、無事に二度目の新年を迎えることができました。これもひとえに

技術研究本部全職員が、責任感と自覚を持って、職務に専念し精励して頂いたおかげであると、心より感謝しております。

さて、平成二十四年を振り返ってみると、その年をイメージする漢字として「金」が選ばれました。ロンドンオリンピックでの過去最多での「金」獲得、山中伸弥氏のノーベル賞受賞など数々の「金」塔が打ち立てられました。他にも九百三十二年ぶりに全国的に観測された金環日食、自立式電波塔として世界一の高さとなった東京スカイツリーの開業と明るい話題もあった一方、経済状況は世界的に低迷を続け、我が国を取り巻く安全保障環境も、北朝鮮による二度の事実上のミサイル発射や、中国当局所属の航空機

や艦船による領空、領海侵犯等、緊張関係が極めて高まっています。こうした安全保障環境の不安定化の傾向は、世界的に見ても、弱まる兆候は全く無く、防衛省自衛隊の役割は、より一層極めて重要になって行くものと考えられます。

昨年十二月十六日の衆議院議員総選挙によって政権交代が実現し、年末二十六日には新政権による組閣が行われました。平成二十五年年度の政府予算案の策定は本年にずれ込むこととなりましたが、予算案の年明け編成は、平成六年度予算以来、十九年ぶりとなります。新政権においては、予算編成に係る指示が发出される可能性があると、大幅な二十五年度暫定予算も視野にいられておかねばなりません。このような状況下、技術研究本部としても、来年度の研究開発事業計画を着実なものとするため、新年当初から、速やかに適切な対応をしていく必要があります。

また、昨年末には、技術研究本部に於いて在籍した幹部陸上自衛官二名が、在籍当時担当した陸上自衛隊新多用途ヘリコプター開発事業に係る「官製談合防止法」違反の罪で、東京簡易裁判所に略式命令請求されると、由々しき事態が生じました。このような事が生じたことは、誠に遺憾であり、これまで、真面目に職務に精励されてきた多数の技術職員が、當々と築き上げてきた国民からの信頼を瞬時に失墜させる行為であると、内局に設置されたUHX事業調査・再発防止検討委員会に全面的に協力しつつ、事実の全貌を解明し、正すべきところは速やかに正し、国民からの信頼を速やかに回復しなければなりません。

一方、技術研究本部は、昨年十一月には、創立六十周年記念の諸行事をとおこりな挙行することができました。ここに改めて、技術研究本部創設以来、諸先輩方が築かれた歴史と業績に深く敬意を表しますとともに、今回の不祥事案も踏まえ、新たな決意を持って、防衛省自衛隊の一員としてより一層信頼され、頼りにされる技術を目指し、皆様とともに新たな七十年に向けた躍進の礎を築いていきたいと思っております。

そのような中、平成十三年度から事業を実施してきた、大型開発プロジェクトの次期固定翼哨戒機及び次期輸送機のうち次期固定翼哨戒機は、飛行試験強度試験とも、残り僅かな試験ケースを残すのみとなりました。関係職員が一丸となって遂行してきたプロジェクトが、ようやく信頼される「装備品」を送り出す事ができる最終段階になりました。海上自衛隊の部隊も、多分XP-1の配備を待ち望んでいることと思います。PCのグループ会議は併せて三百回以上と聞いています。研究室・研究所、開発室・開発官、色々なレベルでそれぞれのチームワークが発揮されたことと思っております。現在実施中の各種試験でも数多くの不具合が

発生し、順調に行かない場合が多々あると思っております。しかし、どんな困難な状況に直面しても、決してあきらめことなく、研究所開発官等が丸ごと対応することが必要不可欠だと思っております。

昨年六月には、米国に出張し、ワシントンDC及びオハイオ州デイトン等を訪れ、米国防総省及び陸海空軍の高官の方々と会談し、その際特に、パワー&エネルギー分野についても米側高官と意見交換をする機会を得ました。また、研究所等の若手技官が米国の研究所を訪問するいわゆる「若手技官者ビジット」も今回で三回目となり、この成果が日米科学技術者交換プログラムや日米共同研究の発掘などに繋がるといった目に見えない成果が上がってきています。特に、若い方々が、海外の実際の研究開発現場を見ることは、相手への理解が深まるばかりでなく、その後の両国の信頼関係醸成に非常に良い結果をもたらすと考えられ、今後とも積極的に推進して行きたいと思っております。

これらことも踏まえて、平成二十五年においては、我が国の安全保障及び国際社会の安定を図る上で引き続き重要な役割を果たしていく日米間の緊密な連携について、技術研究本部としてもBMDの共同開発等、各種共同研究の一層の推進を図るとともに、さらには、武器輸出三原則の緩和により既に新たな技術協力の対話が始まりつつある、イギリスやオーストラリアについても、真に実りある技術協力関係が築ける年にしたいと考えています。

最後になりましたが、新年を迎え、職員の皆様の大いなる飛躍を期待するとともに、皆様とご家族にとり、平成二十五年が昨年にして良い年であることを祈念いたしまして、年頭の訓示と致します。

平成二十五年一月二十九日(火)、技術研究本部電子装備研究所・先進技術推進センター及び艦艇装備研究所は、小野寺防衛大臣のご視察を頂きました。

また、防衛省本省からは、鎌田官房長、渡辺技術監が同行されました。

三宿地区においては、本部長以下による出迎えて始まり、本部長からの幹部紹介、概況説明に続き、施設及び研究試作品等をご視察されました。

三宿地区では、電子装備研究所のAIRBOS、二波長赤外線センサ及びミサイル妨害装置、そして壁透過レーダ及び瓦礫下探索レーダの実験をご視察され、研究の内容、研究成果の反映先など熱心に質問をされました。

先進技術推進センターでは、シミュレーション統合システム及び統合防空システムシミュレーションをご視察されました。

三宿地区ご視察後すぐに目黒地区に移動され、引き続き本部長からの幹部紹介、概況説明に続き、施設及び研究試作品等をご視察されました。

目黒地区では、艦艇装備研究所の、フローノイズシミュレータ及び大水槽をご視察され、帝国海軍時代からの施設や研究設備に興味をもたれ、また、大水槽では、実際に計測する際の方法について熱心に質問をされました。

先進技術推進センターでは、ロボットシステム技術、先進個人装備システム、生物剤検知技術及び携帯型化学剤検知技術及び多重脅威対処個人防護装備技術をご覧になり、先進個人装備システムを、実際に手に取り、またロボットの操縦も体験し、防護マスクも実際に装着され、呼吸のしやすさを体感されました。

目黒地区、三宿地区それぞれ展示説明に対し、実際に手に取り装着するなどしながら終始熱心に耳を傾けられ、「技術には良い技術がある。先進「さい。」との大変嬉しい励まし的な研究を今後も頑張ってください。」とお言葉を頂きました。

小野寺防衛大臣

技術研究本部(三宿地区及び目黒地区)ご視察



平成二十五年一月七日
防衛省技術研究本部長
秋山 義孝

創立六十周年 記念式典

技術研究本部は、十一月十五日(木)、創立六十周年を迎え、内部局と各研究所等で各種記念行事を行った。

この日、内部部局では記念式典が挙行され、午前十時から大会議室において内部部局職員及び各研究所長等が参列して、秋山本部長の訓示に続き技術表彰第三級賞詞等表彰式が行われた後、午前十一時三十分から株式会社東芝ほか十企業等に対し、幹部職員が陪席して本部長感謝状贈呈式が行われた。(表彰者等は以下のとおりである。)

- 技術表彰**
- 第三級賞詞
- 事業監理部計画官付 防衛技官 荻野 直樹
 - 陸上装備研究所 防衛技官 那須野雄介
 - 電子装備研究所 渡辺 聡
 - 三等空佐 鈴木 祐仁
 - 防衛技官 鈴木 祐仁
- 職務遂行表彰
- 事業監理部計画官付 防衛技官 土井 博史
- 第四級賞詞
- 航空装備研究所 防衛技官 宇田川直彦
 - 先導技術推進センター 防衛技官 大崎 馨
 - 防衛技官 佐々木克利
 - 技術企画部企画課 防衛技官 布施 行規
 - 研究開発評価官付 防衛技官 中村 尚
 - 航空装備研究所 防衛技官 枝長 孝幸
 - 艦艇装備研究所 防衛技官 赤木 尚史
 - 先進技術推進センター 防衛技官 倉本 健介
 - 防衛技官 市原 紀生
 - 第五級賞詞 防衛技官 橋野 世紀
 - 航空装備研究所 防衛技官 中山 久広
 - 航空装備研究所 防衛技官 橋野 世紀
 - 株式会社オキシニテック 横須賀市東部漁業協同組合 浦賀久比里支所
 - 株式会社エアロテクノサービス 東通村上田代部落会
 - 東通村下田代部落会



○航空装備研究所 防衛技官 宇田川直彦

なお、職務遂行表彰の第四級賞詞及び第五級賞詞については、同日付で各所属長より伝達された。

第四級賞詞 二十八名

第五級賞詞 十六名

○新野外通信システムの開発グループ

○新対潜用短魚雷の開発グループ

○平成二十年度掃海艇(五七〇トン型)の設計グループ

○八八式地对艦誘導弾システム(改)の開発グループ

○株式会社東芝

○日本電気株式会社

○相模地区自治会

○上原町自治会

○自治会法人山王自治会

○相模原市中央区役所大野北まちづくりセンター

○株式会社オキシニテック

○横須賀市東部漁業協同組合 浦賀久比里支所

○株式会社エアロテクノサービス

創立60周年 記念ロゴ決定

技術研究本部では創立六十周年記念行事の一環として、技術研究本部のシンボルマークと併用して使用する「ロゴ」を技術職員へ募集した結果、応募総数四十七作品の中から、以下の作品が選ばれ、十一月十五日(木)創立六十周年記念行事において表彰式が行われた。

受賞者については以下のとおりである。

○最優秀賞 岐阜試験場 整備班 二等陸曹 小山 史哲

「明日の防衛を創る」



ら、以下の作品が選ばれ、十一月十五日(木)創立六十周年記念行事において表彰式が行われた。

受賞者については以下のとおりである。

○最優秀賞 岐阜試験場 整備班 二等陸曹 小山 史哲

「明日の防衛を創る」

平成二十四年度 永年勤続者表彰

技術研究本部は、十一月一日(木)、平成二十四年度永年勤続者表彰を行い、二十九名が受賞した。

受賞者の所属・氏名は以下のとおりである。(写真は本関係表彰者のみ。)

総務部総務課 安瀬 進

総務部総務課 豊田 正信

総務部会計課 鈴木 利法

技術企画部企画課 久保 浩

技術企画部技術情報課 池田 真也

事業監理部計画官付 鈴木 俊一

技術開発官(陸上担当)付 森山 直樹

技術開発官(船舶担当)付 木原 一仁

技術開発官(船舶担当)付 井上 勇

技術開発官(航空機担当)付 中澤 裕	技術開発官(航空機担当)付 小柳 茂	技術開発官(航空機担当)付 伊藤 健	技術開発官(航空機担当)付 本堂 道行	技術開発官(航空機担当)付 永友 賢治	技術開発官(航空機担当)付 矢野公美洋	技術開発官(航空機担当)付 岩尾 哲郎	航空装備研究所 福田 浩一	陸上装備研究所 蓬台 治徳	艦艇装備研究所 宇野 毅	艦艇装備研究所 小西 則好	電子装備研究所 村上 良行
--------------------	--------------------	--------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------	---------------	--------------	---------------	---------------

○優秀賞 研究開発評価官付評価官 防衛技官 工藤 順一

「DEFEND OUR FUTURE」

陸上装備研究所機動技術研究部動力研究室 防衛技官 吉川 毅

「LEAD THE DEFENSE TECHNOLOGY」

○佳作 陸上装備研究所総務課長 防衛事務官 宮崎 康之

「Both」なげよう技術の輪 FOR THE TEAM「SDF」

航空装備研究所航空機技術研究部航空機構造研究室 防衛技官 岡崎 智春

「技術で守れる未来(あす)がある」



航空機用エンジン部品で 日本チタン協会 開発功労賞を受賞

航空装備研究所は、「国内開発耐熱チタン合金の航空機エンジン国産部品への適用・実用化技術の確立」に関して、(株)IHIと共同で一般社団法人日本チタン協会より平成二十四年度開発功労賞を受賞し、その表彰式が平成二十四年十一月十九日に同協会創立六十周年記念大会(於宇土会館)において開催されました。

日本チタン協会によれば、開発功労賞は「チタンを利用した新製品・新商品・新技術を開発し、その功績が顕著と認められる個人、又は法人」が表彰の対象とされています。

航空装備研究所では、航空機用エンジンの高性能化に関する研究を継続して実施しており、今回受賞の対象となった「国内開発チタン合金の国産航空機エンジン部品への適用・実用化技術の確立」はエンジンの軽量化のための技術のひとつになるものである。チタン合金は鉄系の合金やニッケル基合金よりも密度が小さいことから、エンジンを軽量化するために航空機用エンジンの研究・開発の歴史の中で、チタン合金製部品の適用部位を拡大することが行われてきた。特に高温での強度特性に優れた耐熱チタン合金を用いることで、従来ニッケル基合金で製造していた部品を軽量化することが可能となる。

この合金が開発される以前に技術研究本部で研究・開発してきた航空機用エンジンには、海外メーカーが開発したチタン合金が適用されてきた。航空装備研究所では、平成



三年度から六年度にかけて、航空機用エンジンの主要構成要素である圧縮機の部品の一部に国内開発された耐熱チタン合金を適用するための研究を実施し、この成果は、平成七年度から二十年度にかけて実施した低バイパス比率ターボファンエンジンである実証エンジン(XF5)の研究において、エンジンの圧縮機の回転体部品へ適用された。なお、実証エンジンは、現在、技術研究本部で研究を実施中の「先進技術実証機」に搭載される計画となっている。また、この耐熱チタン合金は次期固定翼哨戒機用エンジン(XF7-10)に適用されている。

防衛省環境月間における環境川柳の 優秀作品に選出

平成二十四年度防衛省環境月間の行事の一環として、防衛省全職員を対象に環境川柳を募集したところ、約三万四千点の応募があり、その中から優秀作品(十一作品)が選出された。技術研究本部職員の応募作の中から、次の作品が選出され、防衛大臣からの賞状が、外園技術総務部長より伝達された。

佳作

総務部 総務課 太陽光

防衛事務官 川原 重耶

これからの家も 発電所

川原事務官談

「今回、入選するとは思って



いなかったので、大変驚いております。今回、自宅で太陽光発電を始めたことで、環境に対する意識も一層高まりました。」

「防衛技術シンポジウム2012」開催について

技術研究本部(以下「技術本部」)は、平成二十四年十一月十三日(火)、十四日(水)の二日間、わたり、ホテルグランドヒル市ヶ谷において「防衛技術シンポジウム2012」を開催した。本シンポジウムは、例年、技術部の創立記念日にあわせ、開催しているものであるが、今年には特に技術部創立六十周年を記念して、例年にも増して規模を拡大し、多くの来場者で賑わった。また、国内の大学や独立行政法人及び企業の各研究機関の技術者・研究者にも参加していただき、オールラウンドセッション(特別講演、先端技術セッション、研究開発セッション、シニア・シニア・シニア、展示コーナー、六十年記念セミナー、シンポジウム)の試作品を身に着けた隊員による作戦行動のデモンストラレーションも行い、来場者には好評であった。また、「新アスロック」のような大きな展示できる展示品や、動画を活用した解説、動態展示等、来場者に体感していただけるよう工夫された展示も多く、防衛装備品や技術の実施する研究開発活動に興味を持っていただけたと感じている。

一方、オールラウンドセッション会場以外に設けられたシニア・シニア・シニア、展示コーナー、六十周年記念セミナー、及びシンポジウムガイドツアーにも多数の聴講者、見学者が訪れた。シニア・シニア・シニアセッションは、技術部の若手技官の発表や、航空自衛隊航空開発実験集団、防衛大学校の研究開発成果を中心に、ポスター及び短時間の口頭発表を組み合わせて行われ、会場では熱心な質疑が行われた。

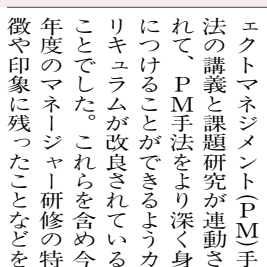
展示コーナーでは、技術部の研究開発内容を、研究試作品を中心に紹介した。今年度は、東館二階の他、西館前の屋外を借りて出来るだけ多くの展示をしただけでなく、屋内では展示できないような車両の展示や、「先進個人装備システム」の試作品を身に着けた隊員による作戦行動のデモンストラレーションも行い、来場者には好評であった。また、「新アスロック」のような大きな展示できる展示品や、動画を活用した解説、動態展示等、来場者に体感していただけるよう工夫された展示も多く、防衛装備品や技術の実施する研究開発活動に興味を持っていただけたと感じている。

六十周年記念セミナーでは、技術部に関する歴史資料、各研究所所在地の歴史の一端を示す資料、模型、パネルなどを展示し、六十周年の防衛技術の歩みを理解していただく展示とした。また、東日本大震災に対する支援活動において技術部が果たした取組みの成果について、赤外線放射温度計測、放射線物質の核種及び放射能濃度の測定に関して、パネルや展示品、動画で紹介した。

シンポジウムガイドツアーは、防衛技術に興味のある若手研究者・技術者に、技術部の若手技官と共にシンポジウム会場を巡り、詳しい解説、質疑応答を通じて、技術部の研究開発活動をより深く理解してもらうことを目的として実施された。二日間での約四十名の参加者があり、好評であった。

二日目のオールラウンドセッションは、前日に引き続き「先端技術セッション」として、ロボット工学、宇宙関連技術を中心に五件の発表が行われた。午後は、「特別講演II」として、英国王室防衛安全保障研究所アジア本部長、秋元千明氏、おのつくり大学名誉学長、神本武征氏、前技術部長、佐々木達郎氏、三菱重工株式会社社長、西岡高氏の四名のパネリストと研究開発評価官・堤厚博技官(モデレーター)によるパネルディスカッション「将来技術との融合を目指す!」を開催した。防衛技術の在り方を多面的に考察して、新たな時代を拓く防衛技術の在り方を多面的に考察する「融合」を行った。「防衛技術との融合を促す良い機会」とするにも、防衛技術シンポジウムの更なる進化が望まれるところである。二〇一三年度は、もっと幅広い年齢層に興味を持ってもらえるようなシンポジウムを目指した企画を計画している。技術職員の皆様の一層のご協力をお願いする次第である。

技術部に関する歴史資料、各研究所所在地の歴史の一端を示す資料、模型、パネルなどを展示し、六十周年の防衛技術の歩みを理解していただく展示とした。また、東日本大震災に対する支援活動において技術部が果たした取組みの成果について、赤外線放射温度計測、放射線物質の核種及び放射能濃度の測定に関して、パネルや展示品、動画で紹介した。



二つのセッションで発表があった。各セッション、展示コーナー及び六十周年記念セミナーにおいては、各技術開発研究所、先進技術推進センターの職員が、日頃の研究開発の成果について工夫を凝らした発表、説明、展示を行うための準備を進め、シンポジウム当日も、熱心な発表や説明、詳しい展示をしていただいた。部外の方も、シンポジウムの参加を快く引き受けていただき、熱心な発表や説明をしていただいた。その甲斐あって、アンケートの結果、来場者からも良かったとの意見を数多くいただいている。

開催された二日間を通じて、シンポジウムが始まって以来最多の、二千二百二十名という多数の方にご来場いただき、技術部の果たしている役割について理解を深めていただくとともに、大学等の研究機関との技術交流の成果を発信することができたと考えている。ただし、一部、混雑のため聴講できない会場があり、次回以降の開催に向けて、改善の余地があることもわかった。

技術部が行う研究開発の成果を広く世間一般の人々に知っていただき、防衛関連企業、大学、独立行政法人等との協力関係を築き、将来技術と防衛技術との融合を図る良い機会とするためにも、防衛技術シンポジウムの更なる進化が望まれるところである。二〇一三年度は、もっと幅広い年齢層に興味を持ってもらえるようなシンポジウムを目指した企画を計画している。技術職員の皆様の一層のご協力をお願いする次第である。

平成二十四年度マネージャー研修は十月十六日から十一月三十日にかけて主としてE2棟二階にある研修室で行われました。今年度のマネージャー研修は昨年度までのそれと大きく異なっている点が二点あります。一点目は研修生に事務官及び自衛官が加わったこと、二点目はプロジェクトマネジメント(PM)手法の講義と課題研究が連動させられて、PM手法をより深く身につけることができるようカリキュラムが改良されていることでした。これらを含め今年度のマネージャー研修の特徴や印象に残ったことなどを

紹介したいと思います。今年度の変更点の一点目については、事務官及び自衛官の方と一緒に研修を受けられたおかげで、多角的な視点でモノを見る重要性を教えられたように感じました。事務官の方は人事・会計など技官が配属されない部署に勤務し、多種多様な経験を積んでいるので、グループワーク等を通じて技官とは異なる観点からの意見を頂き随分参考となりました。また、自衛官の方からは特に課題研究において装甲戦闘車についての情報や今後望まれる装備など、課題研究に取りかかる一里塚を与えて頂くとともに内容の進展に合わせてご意見を頂戴し、課題研究の深堀に役立ちました。私からみてこのようなメリットはあるものの、今後本研修に事務官及び自衛官から継続的に参加して頂き、それを根付かせるためには、参加される方に対して何かキャリアの認定となるものを提供しなければいけないのではないかと考えました。

二点目については、当初私は座学が多く退屈なイメージを持っていましたが、実際に参加してみるとただ聴くだけの座学でなく、聴いた内容に因んだ演習やグループワーク

の五ヶ所です。今回はこれらに他米陸軍協会主催のAUSA2012の見学とマサチューセッツ工科大学・ガスタービン研究所の訪問も実施しました。各訪問先では相互に研究所紹介と研究内容の概要説明を行ったのち、施設見学や今後の協力についての意見交換を行いました。米陸軍通信電子研究開発技術センターでは技術情報交換や研究協力に関する議論を行ったほか、現在ES&P派遣中の岩村技官からは派遣先での研究成果の説明を受けました。岩村技官の研究開発は、今後、学会発表等を通じて公表予定とのことです。米海軍水上戦センター、米陸軍ネイティック兵士研究開発技術セ

とセットとなっていたり、PMに関する講義では宿題や課題研究への適用が課せられていました。そのため、しっかりと話を聞いてこまめにメモを取らなければならないと感じました。想像した以上に実践的な内容が多く、特にPM手法などはそのまますぐに役立つので、言葉の持つ力と使う難しさを思い知らされました。また、白坂先生のシステマティックな講義は、ブレインストーミングにより自分では決して思いつかないアイデアが頻出することになり、その過程の楽しさを教えて頂きました。

研修が始まった当初、研修生間はよそよそしい雰囲気でしたが、グループワーク、課題研究や懇親会など研修が進むにつれて随分打ち合ひが起ち合わせの時間に笑いが起きて夜の勉強会に発展することも珍しくありませんでした。個人的にも、普段の業務ではなかなか聞かれないような質問や、業務に取組みたいと思いがちです。一方で新鮮だったのは、松崎先生のライカビリティの講義の中で、仕事に対する意欲を失っている部下の不満を聞き出し、彼の感情に触れる言

は、今回の三回目ですが、今回は今年度のマネージャー研修の訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

は、課題研究の最終発表会で、本部長以下本部会議メンバーに対して各グループから課題研究の発表を行うわけですが、例年メンバーの方から、新しい装備品の運用構想の妥当性、課題解決へのアプローチ方法や資料内容などに対して、容赦ない意見がぶつけられ、罵倒されるようなイベントであること知らずに行っていました。今年度の課題研究については、本部長から、研修生は研修の大半でPM手法を学んでいるのに、それと関係のない箇所が発表会の質疑応答の中心となるのは避けるよう課題研究の与え方を工夫すること、旨の指示があったら、研究開発の対象とする装備品は与えられ、その運用構想についての説明義務は十分に減らされています。また、「発表会の評価の観点からPM手法を効果的に取り入れるかどうか」に主眼を置いて頂くよう、事前に研修指導官からメンバーの方々にご説明頂いたので、想像したよりは厳しい意見はなく、広い視野を持つことや先を見越した対応を常に考えることなどが、叱咤激励が多かったような気がしました。

な技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

な技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

平成二十四年度 S&TF 技術グループ会議の実施について

平成二十四年十月二十一日(日)二十八日(日)の日程でS&TF (Systems and Technology Forum) 技術グループ会議のために陸上装備研究所の小林所長以下各研究所の若手技官、本部技術企画部企画課、内局技術計画官付等のメンバーで米国に出張しました。

この出張は、将来の日米共同事業や人材交流などの可能性について討議するため各研究所の若手技官を訪問させ、米軍の研究機関の施設見学や担当者とのディスカッション等を通じて今後の日米間の技術協力推進を図るべく実施したものです。

今回訪問した米軍の研究機関は、訪問順に米陸軍通信電子研究開発技術センター、米海軍航空システム司令部、米陸軍試験・評価司令部、米海軍水上戦センター、米陸軍ネイティック兵士研究開発技術セ

平成24年度 マネージャー研修を終えて

平成二十四年度マネージャー研修は十月十六日から十一月三十日にかけて主としてE2棟二階にある研修室で行われました。今年度のマネージャー研修は昨年度までのそれと大きく異なっている点が二点あります。一点目は研修生に事務官及び自衛官が加わったこと、二点目はプロジェクトマネジメント(PM)手法の講義と課題研究が連動させられて、PM手法をより深く身につけることができるようカリキュラムが改良されていることでした。これらを含め今年度のマネージャー研修の特徴や印象に残ったことなどを

は、今回の三回目ですが、今回は今年度のマネージャー研修の訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

は、課題研究の最終発表会で、本部長以下本部会議メンバーに対して各グループから課題研究の発表を行うわけですが、例年メンバーの方から、新しい装備品の運用構想の妥当性、課題解決へのアプローチ方法や資料内容などに対して、容赦ない意見がぶつけられ、罵倒されるようなイベントであること知らずに行っていました。今年度の課題研究については、本部長から、研修生は研修の大半でPM手法を学んでいるのに、それと関係のない箇所が発表会の質疑応答の中心となるのは避けるよう課題研究の与え方を工夫すること、旨の指示があったら、研究開発の対象とする装備品は与えられ、その運用構想についての説明義務は十分に減らされています。また、「発表会の評価の観点からPM手法を効果的に取り入れるかどうか」に主眼を置いて頂くよう、事前に研修指導官からメンバーの方々にご説明頂いたので、想像したよりは厳しい意見はなく、広い視野を持つことや先を見越した対応を常に考えることなどが、叱咤激励が多かったような気がしました。

な技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

な技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

な技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

な技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。

な技術交流を促進するための訪問を歓迎する旨の発言がありました。今回の訪問に際しては、米側受入機関はもとより、技術部の多方面からのご支援をいただき、深く御礼申し上げます。



ミレシオン統合システム(SIMTO)の講義及び演習は、研修の後半で一日やっただけで、課題研究でSIMTOの使用も義務付けられませんでした。しかし、来年度は研修の早い時期にSIMTOの講義及び演習が行われて、課題研究での使用も義務付けられる可能性があります。早いうちに先進センターが行っているSIMTO講習会への参加とSIMTOの操作手順マスターをお勧めします。

最後に、渡邊研修指導官及び松浦研修指導官をはじめ本研修実施にあたりご尽力頂きました関係各位にお礼を申し上げますとともに、各研修生が各研究開発事業の中核になつていくにつれて、研修指導員に深く感謝致します。

平成二十四年度 第五十二回 上級研修に参加して

総務部会計課 防衛事務官 新井雄一郎



私は、平成二十四年十月二十九日から同年十一月二十九日までの約四週間内局上級研修を受講しました。先輩方からのアドバイスにより本研修が大変密度の高いものであり、かつ事務官には必須の研修であるということを知りました。受講にあたり私自身の研修目標として、①研修同期から、それぞれの職務で経験して得た知見などを聞き、自身の今後の業務に生かせるようにすること②日本の防衛に関する知識を高めること③マネジメント能力、リーダーシップを高めることの三点に重点を置いて研修に臨むことといたしました。

座学においては、日々の業務に忙殺されて忘れがちになる防衛省の役割を再認識することができ、広い視野の構築に十分な講義でした。プレゼンテーション実習においては、各自が決められたテーマに基づいて、十五分間のプレゼンテーションの発表を行うもので、私はかねてから興味があった「資源の枯渇」をテーマにして発表しました。自衛隊の各種装備品等にも必要不可欠であるレアメタルにスポットを当て資料作りから根拠のあるものを選び、論理構成も的確にしたつもりでしたが、やはり本番では伝えたいことの半分も伝えることができず論理構成と説明の難しさを

実感しました。「グループ発表」においては、研修員が複数の班に分かれて、現行の防衛法制にかかる問題点について、与えられた五項目のテーマから一項目を選定して発表するもので、本研修における肝であり、各人が役割分担の下資料作成から発表まで行うものです。我が班は、日米防衛協力と題して、日本の安全保障を考慮の上で、日米防衛協力の範囲が拡大している昨今、現行法令における自衛権では対応できないような各種事態を想定した「集団的自衛権の行使」をテーマとして選定し、私自身は書記となり発表資料作成を担当しました。各人から様々な意見を出しあ

って、発表資料を作成したのですが、自身の防衛問題に対する知識不足を露呈してしまい、班員の方々に迷惑をかけたしまいました。

二泊三日の九州地区の部隊研修においては、同期との親睦や絆を深めることができ、今後の貴重な財産であると考えます。また、自衛官の方との懇談を通じて、現場が考える問題点や事務官や中央に対してどう思うか、あるいは本音を聞くことができ、今後の業務に生かせる貴重な経験でした。

本研修のプログラム自体は終了しましたが、私自身の事務官としての研修のテーマはこれからも続くことであり、日々の業務によって実現していきたいです。

最後に研修に参加するにあたり、快く送っていただいた総務部会計課をはじめとした皆様方にこの場を借りてお礼を申し上げますとともに日々の業務に邁進していきたいと思

業務管理講習 (平成24年度) を開催

平成二十四年十二月四日(火・五日(水))の二日間にわたり、平成二十四年度業務管理講習を技術研究本部大会議室(D棟九階)において開催しました。

業務管理講習は、技術研究

本部に勤務する五十歳以上の職員及び受講希望者を対象に、退職後の生活設計に必要な知識・情報を付与することを目的に平成五年度から毎年実施しており、今年度は秋山本部長をはじめとし、延べ九十九名が受講した。

一日目は、大海寺総務課長の開講挨拶に引き続き、「退職後の身近な法律問題(久利弁護士)」、「生涯生活設計・退職後の生命保険(日本生命)」及び「退職手当(給与厚生係)」の講義が、二日目は「退職後の健康保険制度(共済本省支部)」、「退職後の年金(給与厚生係)」、「健康管理(中絶)」、「退職後に利用できる制度(防生協)」、「再就職に関する規則等(人事計画専門官)」及び「叙位・叙勲(服務研修専門官)」の講義がそれぞれ行われた。

中でも、「退職手当」での受講者が自ら行った退職手当額及びそれに係る税金の試算をはじめ、「健康管理」でのメタボリックシンドロームの予防・解消のための内臓脂肪を減らすバランスのとれた食品例や外食メニューの上手な食べ方、さらには禁煙治療の有効性など生活習慣の改善による健康増進を図る内容等の講義については、参加者の多くが真剣な面持ちで取り組み、それぞれの認識を深めた。

これらの講義をもつて、今年度の業務管理講習を修了したが、部内外の講師の熱意ある講義により、受講者に対するアンケートでは、「非常に参考になった」とのご意見が多数を占めた。今後も本講習を開催する予定であるが、より内容を充実させたいと考えており、対象職員の方々の「退職後における健康で豊かな生活の実現」の一助となれば幸いです。

岐阜基地 航空祭について

十月二十八日(日)に毎年恒例の岐阜基地航空祭が行われ、あいにくの天候にもかかわらず全国各地から航空ファンや家族連れら約三万人が詰めかけ、航空ショーを楽しんだ。ゲート付近には早朝からこの日を待ちわびていた大勢の人で溢れ返り、予定の開門時間を約三十分早く、午前八時の開門と同時に基地内には大勢の家族連れらが来場し、滑走路側の展示飛行の見やすい場所を確保するため走り出す姿が見られた。

オープニング・フライトで幕を開けた航空祭は、飛行開演実験団による岐阜基地で見ることのできない異機種大編隊飛行や空中給油機(KC-77)によるデモンストラクションなどが始まると

カメラのシャッターを切る姿も見られた。岐阜試験場においては昨年度引き続き、広報展示を行った。エプロン地区では次期輸送機(XC-2)の二号機及び試験計測用航空機(BK-117)の地上展示を行った。また、BK-117が格納されている総合調整場においてはその一角を利用し、技術研究本部の広報ビデオ、XC-2・IRRの動画の公開、先進技術実証機・F-15の模型展示及び岐阜試験場が過去に実施した試験のパネル展示・同試験の概要説明の展示を行った。

会場は、航空ファンの熱気で溢れ返り、先進技術実証機の模型に関しては、当日のうちにユーチューブにアップさ



荒天のため、最後の展示飛行の中止がアナウンスされる。また、広報展示以外にも庁舎の一部を授乳所として、総合調整場の一部を雨宿り場所として開放し航空祭の支援を実施した。

基地内では他にも、ベトリオット、エンジンなどの装備品の展示。T-77による演技が行われ、多くの人が周りを取り囲みにぎわいをみせた。

東立川地区 ソフトボール大会 第三位

平成二十四年十月二十三日から十一月二十二日にかけて、東立川地区ソフトボール大会が実施された。航空装備場十四チーム中、第三位と大躍進した。



【試合結果】
初戦 13対1
(対 業務諸隊A チーム)
第二戦 7対6
(対 地理情報隊本部チーム)
準決勝 0対12
(対 地理情報隊電子地図中隊Bチーム)

二十歳を迎えて



岐阜試験場 試験班 防衛技官 白井 啓友

二十歳を迎えるにあたり、これまで多くの方々に支えられ、ここまでこれたんだという思いと、ありがとうごさいます」という感謝の気持ちでいっぱい。今までの経験してきた友人や職場の方々も、困っているときは助けていただき、叱るべき時は叱っていただき本当に良い方々に出会えました。今までの経験が、今以上に迷惑をかけないよう頑張ります。

そして家族には恥ずかしくて普段言えませんがここまで育ててもらって本当に感謝の気持ちでいっぱい。この二十年間のおかげで、「少しのきっかけで人はどこまでも変わるんだ」ということに気付かされました。高校三年間の担任の先生から指導された「挨拶」・「元気さ」・「目配り、気配り、思いやり」の三つのきっかけで、幼いころから気が弱く家族にも心配をかけていた自分が毎日挨拶をし、少したくましくなり自分の将来を真剣に考え、自分に必要な力のために努力するまで変わることができました。この少しのきっかけを自分のものに出来るか出来ないかが人生でもっとも大事であると思えました。

今後の目標として、防衛技官として国防により多く貢献でき、一つでも多くの物事を経験し自分のスキルアップに繋げられるよう視野を広げ一日一日を大切にしていきたいと思えます。そして、人との繋がりを大切にしていこうと思

